

研究課題	発達特性のある外国籍等児童の日本語習得に 1 人 1 台端末がもたらす効果について
副題	～e-learning を活用した個別最適な日本語学習の可能性を探る～
キーワード	外国籍等児童 日本語指導 発達特性 認知・読み書きスキル e-ラーニング
学校/団体名	公立横浜市立南吉田小学校
所在地	〒232-0022 神奈川県横浜市南区高根町 2-14
ホームページ	https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/minamiyoshida/

1. 研究の背景

令和 5 年度学校基本調査によれば全国の小中高・特別支援学校等に在籍する外国人児童生徒は 129,449 人で過去最多となり、うち日本語指導が必要な児童生徒数は 69,123 人（外国籍 57,718 人、日本国籍 11,405 人）と 2 年間で 1 万人以上増加している。

横浜市の外国人集住地区にある本校は、全校児童 602 人のうち 57%が外国籍等児童（外国籍および日本国籍を有するが両親のどちらかが外国籍である児童など）であり、つながる国と地域は 20 に及ぶ。日常会話はできても、学習言語が不足している児童や家庭内言語が母語という児童も多く、157 人が国際教室において日本語指導を受けている。

近年、特別支援教育を受ける外国籍等児童生徒が増加している。文科省の調査によれば、特別支援学校の小、中、高等部に在籍する外国籍児童生徒は平成 30 年度の 329 人から令和 3 年度 536 人に増えている。また令和 3 年度に小中学校の特別支援学級に在籍する日本語指導が必要な児童生徒は 2704 人で、比較調査はないものの現場の実感として明らかに増えている。

（「外国人児童生徒等の教育の充実について」令和 2 年文科省による）

本校でもここ数年で個別支援学級（特別支援学級の横浜市での呼称）に在籍する外国籍等児童数は倍増している。市内国際教室設置校でも同様の状況が報告されており、発達特性のある外国籍等児童に対する、有効な日本語指導の在り方を知りたいという声は切実なものとなっている。こうした背景から研究に取り組むものである。

横浜市では 2021 年に GIGA 端末（小学校は iPad）が全校に配付され活用が進んでいる。本校では、一般級だけでなく、個別支援学級、外国籍等児童が日本語を学ぶ国際教室でも日常的に GIGA 端末を活用して教育活動を行っている。

2. 研究の目的

外国籍等児童の増加にともない、発達特性のある外国籍等児童も急増している。本校においても「集中力が持続しない」「日本語習得が思うように進まない」「母語でも会話がかみ合わない」「おしゃべりは上手だが、読み書きができない」など指導上の困難を感じるケースが多く、本人も学習に苦手意識をもっている。こうした児童が日本語を身に付け、学習に参加できるようにすることは喫緊の課題となっている。

そこで、認知機能や読み書きの力を向上させる目的で開発されたベネッセコーポレーショ

ン「まるぐランド for school」(以下「まるぐ」)を導入し、チェックテストで得られた学び方の特性(認知特性)や読み書きの力のデータをもとに、認知特性に合わせた教え方や教材を工夫することで、学習への参加意欲を高め、日本語能力を向上させることを目的として本研究に取り組むものである。

3. 研究の経過

時期	取り組み内容	評価のための記録
2024年 1月 ～3月	<ul style="list-style-type: none"> 令和6年度校内研究計画策定(1月～3月) サブテーマ「誰一人取り残さない学習支援のあり方」 認知機能と読み書きトレーニング教材、日本語教材等の具体的な活用場面の検討 ベネッセ担当者による「まるぐ」の説明(2月) 	<ul style="list-style-type: none"> 研究の全体提案資料 「まるぐ」説明資料
4月 ～5月	<ul style="list-style-type: none"> 1年生児童の日本語能力をチェックし、ひらがな、カタカナアプリ等を活用した日本語指導を開始。 	<ul style="list-style-type: none"> DLA診断シート
6月	<ul style="list-style-type: none"> 第1回「まるぐ」チェックテスト実施。その後週1回、15分以上のペースで「まるぐ」「ドリルパーク」開始。 	
6月	<ul style="list-style-type: none"> チェックテストのデータを分析し認知特性に配慮した教材や指導法による日本語指導を開始(実践①) 	<ul style="list-style-type: none"> チェックテストの結果
11月	<ul style="list-style-type: none"> 国際教室公開授業・研修会(実践②) 全市国際教室担当者向けの研修を実施 講師 横浜市教育委員会指導主事 横浜市教育センター発表会 全市に成果報告 	<ul style="list-style-type: none"> 国際教室児童アンケート 教育センター発表会資料 参会者アンケート
1月	<ul style="list-style-type: none"> 第2回「まるぐ」チェックテスト実施 1年生児童の日本語能力をチェック 	<ul style="list-style-type: none"> チェックテストの結果 DLA診断シート
2月	<ul style="list-style-type: none"> 研究のまとめ 	<ul style="list-style-type: none"> 成果報告

4. 代表的な実践

4-1 全校での実践(重点研究との連携)

令和6年度は学習に困難を感じる児童への支援のあり方を校内重点研究のサブテーマに掲げ、日本人、外国人を問わず効果的な学習支援のあり方について授業研究を通して全校体制で研究を行った。

児童の読み書きに関する実態と認知特性を把握するため、「まるぐ」のチェックテストを6月に実施した。以後、週1回以上各クラスで「まるぐ」の課題に取り組み、基礎的な読み書きの力を鍛えるとともに、並行してAIドリル「ドリルパーク」を朝学習や隙間時間等に行い、国語算数を中心に基礎学力の向上に努めた。

4-2 国際教室での実践経過（1年生 国際教室）

本校では日本語指導を受ける児童が多いため、各学年に国際教室を設置し、国語の時間に取り出しによる並行学習を行っている。今回は1年生の国際教室での実践を取り上げる。

4月：入学直後から国際教室担当が1年生各クラスに入り込み、外国籍等児童の日本語能力をチェックし、取り出しによる日本語指導の必要性を把握

5月：1年生国際教室での取り出しによる指導開始

6月：全校で「まるぐ」の第1回チェックテストを実施

6月：チェックテストの結果を分析し、読み書きの実態や認知特性を知る。

7月：チェックテストのデータを分析し、指導の手立てを一覧表にまとめ、認知特性を考慮した教材や指導法を用いた個別最適な日本語指導・学習支援を開始

11月：公開授業研究会

11月：教育センター発表会

1月：第2回チェックテスト



【教育センター発表会】

【認知特性】

目で見ると・耳で聞くなどの五感を中心とした感覚器から入ってきた様々な情報を、脳の中で「整理」「記憶」「理解」する能力のこと。

【認知特性の分類】本研究では4分類をベースに支援策を検討

- 視覚優位型・・・情報を「見て記憶する」のが得意
- 言語優位型・・・情報を「読んで記憶する」のが得意
- 聴覚優位型・・・情報を「聞いて記憶する」のが得意
- 体感覚優位型・・・情報を「体を動かして記憶する」のが得意



【チェックテストの様子】

視覚優位 <small>全体の8～9割</small>	言語視覚優位	聴覚優位 <small>全体の1～2割</small>	身体感覚優位
<ul style="list-style-type: none"> ○映像、絵、図、文字を表示 ○ICT機器を用いる ○シールやスタンプ、数値で評価 ○注目する文を色で塗る 	<ul style="list-style-type: none"> ○板書に文字情報を ○フラッシュカードやヒントカード ○発表や伝え方の話型 ○既習内容や本時活動内容を文字情報で可視化 	<ul style="list-style-type: none"> ○新出語、名称は繰り返し言う ○歌や語呂合わせ、リズムやメロディ付き ○音声教材を聞かせる。 ○音読した自分の声を聴く 	<ul style="list-style-type: none"> ○ノートやワークシートに書く ○考えを動作化、ロールプレイ ○言葉で復唱、実際に用具を動かす ○発表活動◎

※東京都教職員研修センター「子供一人一人の『分かり方の特性』を生かした指導法に関する研究」（平成28年）参照

4-3 国際教室での特性に配慮した支援（実践① 日本語初期指導）

指導場面では様々な特性に配慮し、日本語を「聞く」「読む」「書く」だけでなく、GIGA 端末上で写真を見たり、ロイロノートに入力したりするなど「視覚」「感覚」に訴える指導を行ったり、野菜・果物の名前を指導する際には、野菜や果物のおもちゃに触れながら遊び、切る、食べる、焼く、煮るなどの言葉を覚えたり、お買い物ごっこで買い物疑似体験をしたりした。

給食がカレーの日には、写真やビデオを見ながらクイズで何の野菜が入っていたかを思い出しながらフラッシュカードを並べて読んだり、味に関する言葉（「おいしい」「からい」「甘い」など）を学んだりした。

認知特性に応じてバランスの取れた指導を行うことで、日本語が得意ではない児童も学習に楽しく参加し日本語を学ぶことができた。



4-4 国際教室での特性に配慮した支援（実践② 日本語と教科の統合学習）

日本語初期指導と並行して在籍学級での教科学習内容を学ぶための支援指導も行っている。

①単元名「おうちの人にウズラのことをしょうかいするぶんをかこう」（1年国語科）

教材文「しらせたいな、見せたいな」（光村図書）

②児童 国際教室通級児童7人

③学習計画（8時間扱い）

本実践はおうちの人に学校で飼っているウズラを紹介する文を書こうという設定で始まった。学習計画を立て、教科書教材で説明文の書き方を知り、それを生かして実際に学校で飼っているウズラを「おうちの人に紹介する文」を書くという順に学習を進めた。

④実態把握 データ活用

日常の学習状況観察に加え、チェックテストで読み書きの実態や認知特性について把握した。

⑤教科書教材の読み取り GIGA 端末による「聞く」「読む」

教科書教材の読み取りでは、デジタル教科書「きく」の機能を使い繰り返し聞くことで文章を暗唱できるくらい覚えることができた。また文字の読み取りに困難を感じている児童向けには「リーディングスラッガー」を用いて余分な文字情報をカットして読めるような支援も行った。GIGA 端末の持ち帰り時には、「録画」機能を使って、教材文を「読む」宿題を課し、外国人児童もたどたどしいながら音読することができた。



⑥ウズラの観察 実体験



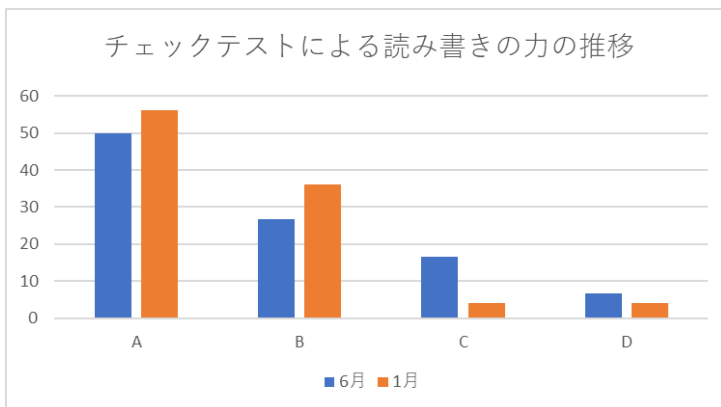
紹介文を書く段階では、教室にウズラを持ち込み実際に観察し、「見る」「聞く」「ふれる」「感じる」など五感をフルに活用して、実物に触れながらウズラを知る活動を行った。この活動を行う際には支援ツールとして「観察お助けシート」を作成し、習った日本語や本単元で使う言葉を常に絵や文字で確認できるようにしながらメモを作成した。

5. 研究の成果

チェックテストのデータを分析し、読み書きに困難を感じている児童の認知特性を把握し個別最適な支援を行った結果、国際教室対象児童は言葉の力が大きく伸びたことが分かる。一人一人の特性に配慮し、視聴覚教材を準備したり、スピーチを繰り返したり、文字を読んだり、聞いたりする機会を増やしたり、諸感覚を使い体験的に学んだり、動作化する機会を意図的に増やしたりすると同時に、協働的な学びやGIGA 端末を活用したハイブリッドな学びを組み合わせることで、楽しみながら学習に参加し、結果として語彙の獲得や学習言語の習得に役立ったと考えられる。また継続的に「まるぐ」に取り組んだことにより対象児童の読み書きの力が向上する結果となった。

5-1 読み書きチェックテストの比較

1年生A組の全児童20人を対象に行ったチェックテスト（第1回6月青 第2回1月オレンジ）の結果、成績上位層（A・B層）が増え下位層（C・D層）が減ったことから学級全体として読み書き能力が向上したことがわかる。



	6月	変化	1月
A層	50	↗	56
B層	26.7	↗	36
C層	16.7	↘	4
D層	6.7	↘	4

対象1年生A組全児童20人

5-2 国際教室通級児童読み書き力の比較（1年生A組国際教室対象児童）

チェックテストのデータを活用し、認知特性を考慮し個別最適な学びを行った児童は中でも大きく言葉の力を伸ばしたことが分かる。

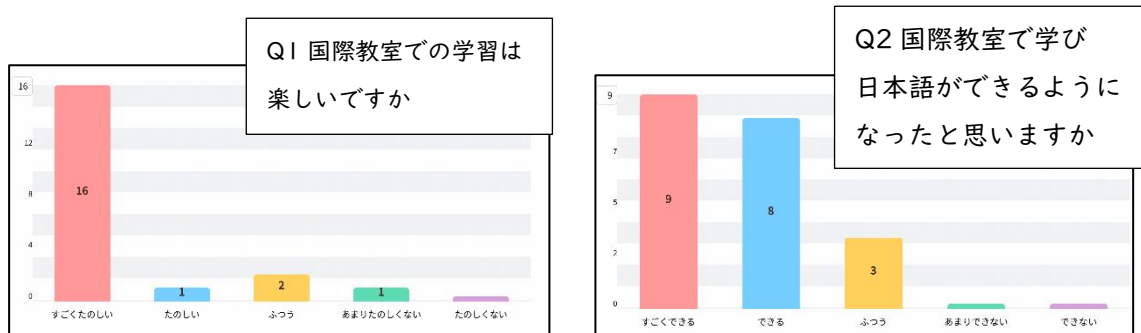
児	層	まるぐのコメントより
A児	D→B	言葉の意味理解や言葉さがしの力が大きく伸びた。
B児	D→B	音の区別が付くようになり促音や拗音の理解が進んだ。
C児	C→A	音の区別や言葉さがしの力が大きく伸びた。
D児	C→A	言葉の意味 促音拗音 言葉探しの力が大きく伸びた。

5-3 国際教室通級児童日本語力の比較 (1年B組 C組国際教室対象児童)

またDLA 語彙力チェックテストによる日本語力測定でも4月と1月のデータ比較で語彙力(語彙数)が大きく伸びていることがわかる。

	E児	F児	G児	H児	I児	J児	K児	L児
4月	0	13	22	19	0	0	7	13
1月	34	30	36	38	32	41	38	27

5-4 国際教室通級児童アンケート (1年生ABC組国際教室対象児童20人)



11月に国際教室通級児童を対象に行ったアンケートでは、Q1「国際教室での学習が楽しい」と回答した児童が85%、Q2「国際教室で学んで日本語ができるようになった」と感じている児童が同じく85%となっており、国際教室での学びが楽しく、日本語能力の向上に役に立っていると感じている児童が多いことがわかる。チェックテストで得られたデータを分析し、児童の学習上の特性を知り教材を作成したり、教え方を工夫したりしたことで、学習に興味を持って積極的に参加し、日本語で生き生きと表現する姿が見られたことは何よりである。

5-5 成果の発信

研究を推進するにあたっては、横浜市教育委員会主催の日本語指導者リーダー養成講座での研究と連動し、横浜市教育センター発表会で市内外の国際教室担当者にその成果を発信した。参会者からは「認知特性を考慮した指導法をバランスよく取り入れることで、個別最適な学びにつなげるという方針が参考になった。」「大変勉強になる発表でした。それぞれの児童にあった手立てを見極め指導法の工夫を行うことが大切だと強く思いました。」「国際教室で行っている様々な支援がどの認知特性に効果的か教員が意識して行う事は非常に意義があると思いました。」「療育の立場からとても参考になりました。特別支援教育に活かせる手立てだと思いました。」「子どもたちへのアプローチの仕方、授業の工夫がどれも子どもに寄り添っていて素晴らしいと思いました。聞いていてワクワクしました。」などの感想が寄せられた。成果や課題が可視化できたことは波及効果である。

6. 今後の課題・展望

eラーニングによるチェックテスト結果から把握した学び方の特性（認知特性）に着目し、一人一人の特性に考慮した個別最適な日本語指導のあり方を模索した。一連の実践から、リアルな体験と ICT 活用の組み合わせが大切であり、ハイブリッドな学びで子どもの学ぶ意欲を引き出すことで日本語力の向上を図れるという思いを強くした。

このことは、外国籍等児童の日本語指導に限らず日本人児童の学習にも活用できるので、全校でこうした考え方を生かした学びを展開していくことで全児童の学習意欲や読み書きの力の向上に貢献できると考えている。

7. おわりに

2024年12月の中教審諮問において「学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学びに向かうことができない子供が多くなっています」と学ぶ意欲についての課題が指摘されている。また、「デジタルかリアルか、デジタルか紙か、といった二項対立に陥らず、デジタルの力でリアルな学びを支え（中略）バランス感覚を持って積極的に取り組む必要があります」とあるように、リアルとデジタルを組み合わせた学びこそが問われてくる。

今回の研究を通して、こうした課題に学校がどのように立ち向かっていけばよいのか考える機会となったことは意義のあることである。助成をいただいた財団に深く感謝したい。

8. 参考文献等

・令和5年度学校基本調査 2025/1/2 閲覧

<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>

・「外国人児童生徒等の教育の充実について」令和2年文科省

https://www.mext.go.jp/content/20200528-mxt_kyousei01-000006118-01.pdf

・本田式認知特性研究所

<https://www.cogtem.com/>

・山脇啓造 服部信雄（2019年）「新 多文化共生の学校づくり」 明石書店

・西川朋美（2022年）「外国につながる子どもの日本語教育」 くろしお出版

・齋藤ひろみ（2022年）「外国人の子どもへの学習支援」 金子書房